

134

新作
謠曲
資時

及
附録

目次

- 資時の能畫前後二
- 資時及間狂言全文
- 新曲資時の謠ひ様
- 新曲資時をものせし譯
- 資時の事蹟

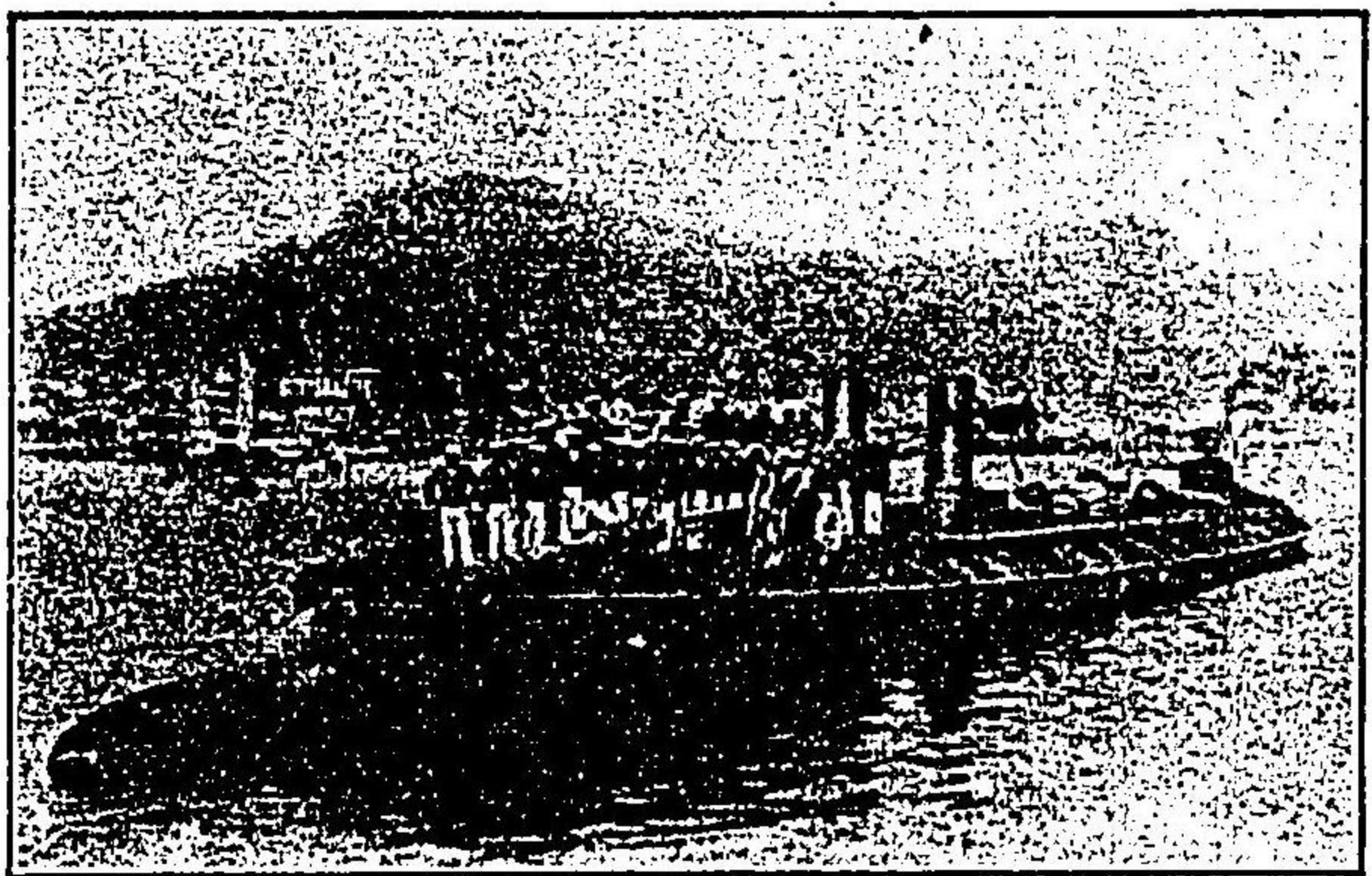
221
775

古への弓矢の道の

ためしもて

水雷を

はなつ海原



資時

特49
111

子詞「個様に候者は。太宰の小貳經資が子に。資時と
者にて候。扱も此度蒙古の賊軍。數千艘の船を寄せ
て壹岐對馬を略し。既に當浦へ攻掛り候間。我が將
士出で、戦ふと雖も。彼れに猛烈なる石火矢あり。
岩をも碎く飛道具に候へば。如何なる勇士も防ぐに
道なく。味方危き由申候程に。防矢の人数に入り。
出陣せばやと思ひ候。然れ共再び生て歸るべき身な

明申
38 3 22
内交



源耕

らねば。今一度母御に對面し。御暇乞せばやと存候。
いかに母御の御入候か。資時が参りて候。母調「なに資
時と申か此方へ來り候へ。扱何の爲めに來りたるぞ。
子調「さん候此度の戰。味方不利なる由申候程に。我等
も出で、戰ばやと思ひ。御暇乞の爲に参りて候。母調
「健氣の事を申すもの哉去りながら。御身はやうく
十二歳。物の用にも立つ可らず。父御を始め多くの
人々。出て戰ひ給ひぬれば。暫く時節を待ち給へ。
子調「いや武士の家に生るゝ者は。胎内にて稱宜言を聞

き。七歳にて敵を討つと申事の候へば。幼けれ共此
の御大事に。いかで此儘居らるべき。和唯御暇を賜
はれかし。母「實言れたり恥しや。我も人には後れま
じと。弓矢を取り出で與ふれば。子「實にありがたき
母の御慈悲。うけて心も勇みある。母「高麗唐土の戎
夷等を。討てよと言ひやる言の葉に。子「露をふくめ
る恩愛の。母「思ひは同じ。二人親と子の。地上別れも今
は君の爲。打く。捨つる命は惜しからじ。惜むは名
なれ日の本の。光りはなぞか曇るべき。實や世の中

は定めなきこそ定めなれ。花も散り月も缺ぐ。雪や
 其の名を富士の根に。あげて散しく若草の。曾我の
 昔も思ひやれく。子詞「や。あなたにあたつて鯨波起
 り。雷火の響き夥し。扱は敵こそ寄すると見えなれ。
 強早お暇と夕潮の。地上寄する敵に向はんと。打く。母
 諸共に勇み立つ。矢竹心の一すじに。門前さして出
 て行く。門前さして出てゆく。中入

兵「聞たかく。ア」聞たぞく。兵「聞たかく。ア」聞たぞく。
 兵「扱何を聞たぞ。ア」何をも聞かぬが。そなたが聞たかくといふ
 に依つて。聞たわくといふた。兵「エイこゝなものか。知らぬに返

辭するといふがあるものか。語つて聞かそう良ふ聞け。ア」心得た。
 兵「扱も我國王忽必烈は。大祖成吉思汗の偉業を受け継がれ。既に世界
 の大半を攻め取られ。御威勢は天下に敷き。靡かぬ草木も無き有様
 じや。ア」其の通りじや。兵「さるに依つて此の日本國をも従んと思
 召れ。先づ使を立て、よしみを結ばうと申入れられた所が。鎌倉の
 執權北條時宗といへる奴は。中々剛情者で取り合はず。剩へ其の使
 者の首を切つて河原へさらしおつた。ア」ひどい事をするものじや。
 ア」恐ろしい事じや。兵「國王大ひに怒らせられ。急ぎ日本に押し渡
 り。踏潰してしまへとの嚴命があつて。扱こそ今度の戦となつたの
 じや。ア」ふうん。兵「先づ對馬壹岐と攻めたが。敵は思ひ掛けない
 事ではあり。お負けに石火矢といふ飛道具を使ふたに依つて。雞卵
 を石で押し潰す様なもので。忽ちに攻め落し。金銀財寶は申に及ば

す。手まどいになる奴は片端から打ち殺し。みめよき女は悉く船中へ連れ込んだ。アト「追々には我々迄へも分配があればよいが。兵所が其女共が我國の女とは違ふて。どれもこれも情剛計り。一人として大將の仰せを聞く奴が無い。憎い奴だとあつて。女共の掌へ穴を明け。繩を通して船ばたへ吊り下げられた。アト「かあいそうなことをしたもののじや。アト乙「誠に其の通りじや。兵所で大將の仰せには。個様な人間は一人でも生して置ては後日の妨げじやに依つて。見當り次第皆殺してしまへとのお事で。深山幽谷迄も探しまわつた。アト「山の中では容易にや知れまい。兵所が子供といふものは頑是の無いもので。今にも敵兵が來るとは知らず。時々聲を揚げて泣くは。アト「日本でも子供は泣くか。兵何程日本でも子供の泣くは同じ事だ。其の聲を聞くとすぐに探し出して。誰彼の別は無の皆打殺してしまふ

た。アト「思ひ切つたことをしたもののじや。兵所が此頃では一向に子供の泣聲を聞かぬ。聞けば大勢には代へられぬといふて。皆子供をさし殺してしまふたといふことじや。アト「日本人の剛情はどれ丈けか分らぬ。兵誠に驚いた國柄じや。此の有様では尙更以て生しては置けぬ。急ぎ探せと仰せ付けられたに依つて。個様に連れ立つて探しに出たのじや。汝等もしつかりして探せ。アト「大將の仰付なら仕方もないが。案内を知らぬ山の中では心細いことじや。其上日本には神風といふて恐ろしいものがあるといふが。山の中ではなんと吹きはせまいか。兵海で吹くなら山でも吹かぬとはいへぬわ。ろう聞くとどうやら氣持が悪い。併しながら此儘で歸られもすまい。先づ汝等から行け。アト「身共らについて來たもので先達は汝が役じや。先づ汝から行け。兵「エイこゝなものか。個様な時にはそちらが先へ

行くものじや。ア「常には威張つて置いて。個様な時に後へ下る事は出来ぬ。汝から行け。兵「これはいかなこと。そちらから行けといふに。ア「いやならぬ汝から行け。そりや吹て来たわ。兵「ナ、なにが吹て来た。ア「神風といふのではあるまいか。あれあの山の木が動いて。何となく谷が鳴る様な気がする。個様な所に長居は無用じや。某は戻らう。兵「やい、其様なことをいふて某をどうする。ア「そちはそち次第じや。そりや吹て来たわ。兵「やあ何といふぞ。ア「こりやこうしては居られぬ。戻るぞ。兵「恐ろしや。兵「戻るなら某も連れて行け。待てくれ。くくくく。一段大い「寄せ掛けて。うつ白浪の音高く。ときを作つて。騒ぎけり。敵將「抑も是は蒙古の將軍。劉復亨とは

我事なり。詞扱も我王忽必烈は。此の日の本を従へんと。温言を以つて誘ふと雖も。北條時宗之れに従はず。剩へ我が使者を切つて武威を示す。急ぎ討伐せよとの嚴命を蒙り。唯今當浦へ攻め入り候。いかにやいかに兵ども。はや打入れやと呼はりけり。大い「かしこまつて候とて。皆一同に。切つて入りけり。早笛子「いかに方々。敵軍はいづくに候ぞ。何箱崎の松原とや。いでくさらば向はんと。夕波の。寄せては返す荒磯に。地「くだけて珠と。なりぬらん。打上



あらおびたし軍兵や。打く。たとひ幾万ありとて
も。いかに石火矢猛くとも。我が鏑矢は神守る。受
けて力の程を知れ。く。敵將「あれを見れば小冠者一
人弓矢を携へ。敵に憶する色もなし。詞を掛けて見
ばやと存候。やあそれなる冠者に物申さう。そも汝
は誰なれば。稚き身にて唯獨り。此の大軍には双向
はんとはする。急ぎ其名を名乗り候へ。予是は音に
も聞つらん。曩に蒙古の國使。趙良弼を逐ひ返せし。
太宰の少貳經資が子に。武藤の資時十二歳。腕に覺

えの鏑矢を。受けて褒れを。顯せよ。敵將「實にゆし
くも名乗るものかな。扱は汝は太宰の小冠者。其の
志は殊勝なれ共。唯蟠螂が斧に等し。早々我に降る
べし。予「そも日本には昔より。死あるを知つて降る
を知らず。いでもの見せてくれんずと。地上「母の賜ひ
し鏑矢を。打く。弓につがひて引しぼり。放せど力
足らずして。前に落つれば敵軍は。一度にとつとぞ
笑ひける。予「個程の恥辱よもあらじ。今は敵に討れ
んと。地「小太刀を抜いて立ち向ひ。打く。彼の太勢

に割つて入れれば。敵の兵わたりあい。火花を散して
 戦ひける。カゲリ敵將カゲリ敵將敵將其時馬より下り立ち。く。
 天晴れ小冠者手取りにせんと。鉾を投げ捨て掛りけ
 るを。彼方にそむき。此方にはらひ。飛鳥の如く切
 立ければ。さすが健氣に感じけん。打捨てこそ退き
 けれ。子子今は資時は是れ迄なり。地地今は資時は是れ迄な
 りと。神に祈誓を掛けまくも。彼の小刀を振りかさ
 せば。雲立ちおほふや松原の。常盤の色の若緑り。
 扱こそ後に資時が。武名は世々に響きけり。く

附 録

新曲資時の謠ひ様

此の新曲を是非出版せよと奨めらるゝ方々の内には、此の本を見ても
 謠へる様に節を附けよと申さるゝ方もありまして、一時は何流にも關
 係せぬ能樂館特有の符合を拵へて見ようかとも思ひましたが、何れ此
 謠を採用さるゝ流義では、夫々謠本も出来ることであるから、それ迄に
 せぬ方が良からう、されども折角賛成して希望せらるゝ方のお志を無
 にするも心なきことである。元來此の資時は、最も小規模の現在物で、詞
 が多く謠ひ物としては甚だ簡易なものであるから、文章で説明しても
 大體は分るであらう、其説明に基き、謠ふて見よと思はるゝ方が、面々流
 義の節を付けて見られたらば、其れで謠はれるに相違ない、其れが又一

つのおたのしみにもならう、とこう考へましたから、左に其の心持と節附の見込を申述べること、致しました

○此謠は資時と名けた位であるから、資時が主人公たるは言ふ迄もないから、一種の子供能として此の資時をシテ、母をツレ、敵將劉復亨をワキとしてもよいが、又一方からいへば主人公とはいふものゝ子供のことであるから、是れは子方として、母と劉復亨とをシテとしてワキなしにするもよい、其邊の取捨撰擇は演者其人の考へに任すべきであるが、其のシテとなりツレとなるに従つて、其謠方の位に相違を來すは自然の數である、左に記する謠方は、資時は子方とし、母と劉復亨とをシテとした方であります

○子方の名乗りはザクリと威ひよく謠ふが良からうと思ふ、先づ放下僧のツレを子供で行く様な鹽梅だが、身柄が太宰の小貳の子といふの

であるから、どことなく品位を持つてもらひたいと思ひます
○母は先づ柏崎の前シテ位の氣位でやるのが適當かと思ひます、景清のおつかさんが、若草の隠れ家に託住居して居るといふよりは、位がある方が折れ合が良からうと思はれます、健氣のことを申すものかなよりは、内心にさすが我子よと嬉しく思ふ氣もあれど、先づ諭しなだめるといふ様な心持が必要でせう

○子方のいや武士の家によりは勇氣りん々々として侵すべからざる所あるべきだと思ひますが、唯御いとまを賜れかしとサシゴエとなりて後には、何となく此内に哀れを感じる所があつて、名残の心持を含ましたいと思ひます、それで此所を和吟にしたのです

○母の實に言れたりからは、我が子の勇氣に感じ、我が身の女々しかりしを恥ぢたのですから、引立つ心持は勿論ですが、ざりとて一世の別れ

は心に期する所内に名残の惜しまるゝ心は忘れられまいと思ひます
 ○此の以下地へ渡す迄の掛合は普通の順序で次第に呼吸を詰め氣を
 抜かさず謠ひ進む中に勇氣と恩愛の情の籠る場所で若し観客中に涙
 でも浮めらるゝ方があるなら此所であるかと思ひます二人連吟の親
 と子のは普通地へ渡す謠方で親のとを引きて浮き子のと二字押へ
 下げにします

○地謠も無論和吟で別れのれの字に廻しがあつてためは二字引で据
 へて打切となり返しは同様で句切は短く捨つる命の命に「クリ即ち下
 掛でいふシホリがある惜むはのはが一字下げで名なれのれで引き日
 の本のと下げる光りは下でなどかの三字をハリ上げ曇るより下げべ
 きをへエキイとふり廻しヤアの間となる實やより張り上げ中はと
 下げる定めなきより又張り上げ定めなれのめの字より下げナアレエ

とふり廻しヤアの間となる花より張り上げもで一字下げ月ものもよ
 り下げる雪やより張り上げ名をのをで引き富士の根にと下げあげて
 のげを入り即ち一字シホリにして散しくのくを引き若草のと下げの
 の字を廻す會我のより下で行き思ひやれのやの字を引ひて張り上げ
 れと下げ返しは會我のの「を」を廻し昔しのかを引き思ひのひより下げ
 や「れ」と二字引に据へる

○子方の「や」の詞は地謠の切れ目へ掛けて謠ひ驚くといふ内にも扱こ
 そ來れりと愈々決心の臍を確める心持を示し次の詞も威ひよく早お
 暇よりは強吟で普通の地へ渡す所の様に夕潮のはの字を張つての「
 オ」の字を削り押へる
 ○地も同じく強吟で鋭く威ひよく受け向はんとと二字引に据へ打切
 となる廻しなしにても亦敵のきの字を廻してもよし勇み立つのみよ

り下げて押へ矢竹より又張り上げ心ののほで引き一すじにと下げ押へ門前より又張り上げ出てのを引き行くを下げ返しの門前のん即ち四字目で廻し又出てのを廻しゆくと二字引きに下げて垂れぬ様に止める先づ羅生門の中入前の小形であの内に子供といふことゝ母が見送つて居る丈けの心持を少しく交へたらば良からうと思ひます併し此所は決して女々しい別れでは無い勇ましい出陣ですから謠は勇ましく謠ひ母の形で名残の模様が見える位が適度かと思ひます

○一聲で出て来る敵軍の寄せ掛けては烏帽子折の後シテの出其儘で良からうと思ひます

○敵將劉復亨は先づ正尊の土佐坊といふ位の所かと思ひます初め二句丈けは節を附けて謠ふが良いと思ひます併し二字押へ位のサシ聲で廻し節などは無い無論強吟以下惣て強吟です扱も我王より攻め入

り候迄は惣て詞で威ひよく丈夫に謠ひいかにやより一聲掛りの乗り節で始めのいを引きかを入り廻しに太く謠ひあとをさらりとはこび呼はりけりの終りをステル

○立衆大せいゝの畏つて候とは大佛供養其まゝでかと引きしの字を入り廻し皆のなを廻し入りのりを廻しげりのりを引きて又振る節とする此所で敵軍は皆脇坐の方へ進み行き早笛となつて子方が出て来る恰も夜打會我の後シテの出と同じです

○子方は走り出で橋掛りに止りいかに方々と呼び掛ける謠方で終りを引く敵軍はより詞にてさも勇ましくいでくさらばより節となつてとおと終りを割つて押へる夕波のよりは橋辨慶の牛若の出の夕雲のと同じに謠へばよし

○あらおびたゝしの軍兵やの地謠も先づ橋辨慶の面白の景色やなの

所と同じ塩梅で節も頗る簡單でよろしい。猛くともものをやり廻しにしてヤフハにし、我のわを太く廻しがを引きてトリを附けてもよし。然うすれば鏑矢はのを引き神守ると押へ下げ受けて力の程を知れ。のれを強く押へ返しの頭字を廻し力のらより下けて二字引で止める。○次の敵將の詞の所は正尊の辨慶の格で遙かに呼び掛けて尋る邊り堂々と太くうたふ。

○子の名乗りは詞にても節にてもよし。太宰の小貳よりを節にしてもよし。節とすればクリ地の謠方にて、田村の是れは人皇五十一代といふ様な塩梅となる。子供の謠故餘り節數となるは宜しかるまじ。○次の敵將の詞の最後の早々我に降るべしの一句ははと引きやと廻し降るより下として浮き押へてべを廻し節にしたる方幾干か嘲弄せる趣き見えて面白し。

○子の詞は愈々鋭くいでものよりは節として終りをステとするか又は是れ迄は詞で通し、母の賜ひし鏑矢の一句を子方の謠とし返しよりを地で取るも一方法なり。

○此の邊の地謠の節は惣て簡單にて大佛供養に類して居る。弓につがひて引きのきを廻し放なせどのなせどをクリ即ちシホリにし落ればのばを引きて敵軍はを押へ下けどつとぞと張り上げて笑ひけると押へけると短かくふりて止める。

○子方の詞はいかにも決心せる心持にて、今はより節とし最後のとの字を割り押へる。

○小太刀を抜いてよりの地は大佛供養の名乗りもあへずあさ丸をと同じにて、彼のの「の」の字を廻し大勢にのを引きわたりあいのいを廻し散しての所より崩し戦ひけるのけへ廻しと引きを付けるを振り据

へてカケリとなる

○敵將其時馬より降り立ち烏帽子折の熊坂の長範六十三と同じ謠方にて廻しも何もなくスラリ々々と威ひ強く謠ひ退きけるをステル

○今は資時は大佛供養の今は景清の通りにて「ヤ」の間となり彼の「ノ」に廻しを付け小刀をのをを少しく持ち振りをヨセ扱こそ後にのりを引き資時とスツカリと謠ひ響きけりのりを強く押へ返しの頭字ふを廻し世々の二字目で下げけりと据へて終りとなる

新資時をものせし譯

謠曲は足利文學の精粹であつて明治の今日之れを新作しても決して

是れに優るもの出来ぬと申すことは廣く文學社會及謠曲を嗜む人々の間にも行れて居る議論であります況して文筆の力の無いものが今日假りにも謠曲を新作すると申ては實に生意氣千萬な次第でありますすが是れには大ひに譯柄のあることですから一應其の此所に至つた次第を申述べて置ふと思ひます

二月中旬の事でありました片上伸君から大日本護國幼年會の湯池丈雄といふ方が遭ふて話したい事があるといふて居らるゝが何時なら宅に居るかといふ問合せが参りました世間の事に疎い私は大日本護國幼年會といふはどんな會やら湯池君といふはどんな方やら知りませんからなんのことであらうか何か能樂に關したことではあらうかなんであらう子供に分かる様に能の話でもせよとの事であらうか能は日本文藝の基礎たることは誰人も認める所であるから其維持に就

て何か良い知慧でも付けてやるといふことであらうかなど、慾ばつた考へも持つて見たが何事とも分らぬ併し遭ふの遭はぬのといふ様な身の上でもないから、其の在宿日をお答へしたら、兩人して來訪せられたのが二月廿三日の午前であつた、片上君の紹介であるから定めて若い方であらうとの想像であつた所が既に半白以上の老人じやつたが中々若いものも及ばぬ元氣で、一見尋常の人で無いと思れた、語らるゝ詞には熱心が溢れて居るが、實に熟練なもので聞惚れずに居られぬ、成程人を説くのは斯の様にせねばならぬであらう、我らの及ぶ所で無い、能樂俱樂部の盛んにならぬも、全く我が及ばぬ爲めである、志に於ては譲らぬかも知らぬが、其の行ひとして成程及ばぬ、随分困難せられたであらう、能く忍耐せられたものじや、個様な人は尙他にも幾干もあるであらうか、其れでは我々の仕事の進まぬ筈じや、能樂會なども振はぬ筈

じや、我身の上につまされて既に第一着に感心した上に、其の事柄を聞いて見ると、いかににも良い思ひ付であり、又實に國家の爲めに必要な仕事であり、又最も時期に適して居る、此の能役者の忙しき時期に可流多數の流儀を集めて二日間、而も土曜日曜に慈善能の催しの周旋せよとは、瘠馬に重荷である、況して蒙古の亂に關係ある新作などは出來そうにも思れぬ、然し資時の事蹟は面白い材料ではある、出來るか出來ぬかは、兩つながら分らぬが、此の會の目的といひ、湯池君の熱心といひ、頭からお断りするも本意じやない、及ぶ丈はやつて見ねばなるまいと思ひ、能樂雜誌の編輯を終ると直に飛び出して走り廻つて見たが、寶生流丈けは、三四兩月中は土曜日曜といふては既に先約があつて仕方がない、五月にも入らばといふことで不調に終つたが、他の四流は皆な繰り合せてやつてやらうとの事、斯く容易に纏るも、全く目的が良いからの事

其所で乗り気が出て新作の事を言ひ出して見た所が文章さへ出来れば節や形や拍子の事は已れの方でやつても良いとは觀世清康氏の快諾、こうなつて來ると何やら氣になる、寢床の内へは入つてから護國美談を讀んで見ると、何か者になりそうになつて來る、湯池君の熱心なる勸誘は、ドシ々と響いて來てやれ々と促す様な氣がする、資時の健氣な面影は目の前に浮んで來る、數千艘の船影も見える、箱崎の松原も顯れる、紀念碑、神風怒濤、亡者、勇將、敵兵、婦女の慘、小兒の悲、何にか撮へられそうになつて來る、第一に頭へ浮んだは都方から出た僧が、筑紫へ來て紀念碑を見た折柄、櫻花が咲いて居て、敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花といふ和歌を口ずさむ、元寇の昔を追想して幽魂を吊ふ、其所へ童子か出て來て、例の通りのうゝ御僧と呼び掛ける、問答より元寇の戦物語となる、資時十二歳の時の武功を語りて後ち消へ失せる、

待詔となつて今度は黒垂れに梨子打といふ修羅いでたちとなつて出て、十九歳にて討死の場合を語る、とこふいふ順序にも考へて見たが、中々大仕事で我が鈍筆でもものになりさうにも思れぬ、前シテを敵將の亡魂として戦物語をさせ、阿漕の中入の様に俄に早手吹きで神風當時の姿を寫して消へ失せ、後段は日本の神様を出して、此の神國はいかで他國の僻を許さんや、御世萬歳と壽きて目出度神舞などにするも、新規の趣向でもあり、時節柄面白とも思ふたが、容易にもものになりさうにもない、そんなひねくつた考へを出さずに、先づ關原與市位のものとして、敵將と資時の取り合にせう、始めに何を出そうぞ、親爺の經資を脇として出し、之れが次第道行で將に出陣せんとして居る所へ、のうゝと呼掛けて資時を出し、我も御供せんといひ、汝は幼ければと止める、いや武士の子はとやる、遂に父も感心して共に出軍するといふことで中入、後

は橋辨慶の様に扱も資時はと出て待つて居ると敵將が兵を連れて出て来る鳥帽子折の様に如何に兵共とでもやり掛けて戦の状況を語る内に日本人の武勇に驚く事を言ひ顯し早打入れやで資時との太刀打となる。こゝも考へて見たが同じ親子の別れなら母親の方が情があつて良からう。悲しむ母の門送りも大佛供養をつくりとなり且つ別れの愁歎も古めかしい。さつぱりと母諸共に勇み立つ位が良からう。扱後となつては弓は射つたが矢は届かなんだといふ事蹟はどうしても顯して見たい所が形の方を考へて見ると随分間が抜けてやりにくううである。清廉氏のことであるから何とか工面して呉れらるゝであらう。子の方では矢が届かなんだので後へシツテ坐し一度は憂へに沈んだが思ひ直して切り入るとしても良いが敵將の引込む所はどうしたら良からう。まさか資時に切られて二つになつたとする譯にも行く

まい、まあそこも清廉氏任せとして其健氣に感じて退くことゝせう。立衆との打合は四方へばつとぞ位で引込ますことゝする積りであつたが、それではあまり淋しいといふ清廉氏の注文で、カケリ入とし火花を散して戦ひけるとやつたが、其所で子方の始末はどうつけ様ぞ、もうこゝうなつては今は資時は是れ迄なりより仕方は無い、愈々大佛供養の通りだ、何とぞ文句は替へたいものだ、彼のあざ丸をさしかざせばは實に甘い、是れで抜いて居る太刀のしまつもつく形も立派で振ふし、かし真似も嫌やだ、重て時節を松原のとやつてしまおふか箱崎には八幡様もあるから、何か此所へは句せたい、愈々少し祈念を致しつゝ、が欲しい、何も此の作を以つて従來の謠より優つたものにしたといふ譯ではない、したくないでもないが出来る譯が無い、唯湯地君の熱心に對し、少しでも護國幼年會のお爲にしたいといふ丈けの事じや、そふして見ると、形

もつけよし見ても立派な方がよからう寧ろ思ひ切つて大佛供養のまねにせう去りとして茂みに飛び入りよりは後來戦功を立て、討死した事を匂せた方がよからうこんな考へから遂にこんなものが出来たので誠に恥しい次第であります、こんなものすら我慢して清廉のやるのは實にかあいそうなものだと思召す方は此の好材料によつて完全なものを作り出され、發企人諸君及び演者の満足を計つて下さる事を願ひます、誠の急場間に合せ丈けのものですから其のお積りで御覽を願ひます、終りに臨んで一言したいのは能樂と大和魂との關係です、此の事は昨年戦争の始まつた頃より雑誌能樂紙上で度々申し述べましたから、こゝではくどくは申しませぬが、日本の武勇といふこと、此の能といふ舞樂は餘程深い關係を持つて居ります、第一此の舞の形といふものは皆な武術から割出したもので悉く基く所があります、又諸

の調子に於きましても艶つばい淫聲を厭ひまして雄壯沈着といふことが主としてあります、從來此の能樂と申すものが日本武士道の上に及ぼして居る影響といふものは實に計り知られぬ程であらうと思ひます、近い話がスワ鎌倉といふ詞に就て考へて見ましても、確に能の鉢木から起つたに相違ありません、恐らくあの詞は他に出所はありますまい、其外此の能が元となりて芝居や俗曲も廣まり知らず識らずの内、に武士道の裨益をして居ることは實に驚く計りでせう、然るに其の能樂は將に絶えんとする悲境に陥つて居るので、諺のものまねをする人は殖へて居りますが、能の實體は日に増し衰へて居ります、日本武士道の必要は此度の戦争に於て、歴々として證據立てられて居ります、其の武士道に關係の深い能樂を絶やすといふことはせられましますまい、どうか此の問題に就ても皆さんの御考を煩したいものです、私及び

ながら、新作資時を書きましたも、一方には微意の在る所を御推察を願ひたく存ます

資時の事蹟

蒙古の我が國に離し、一時は暴威を振ひしも、北條時宗の英斷に依り、日本ほんの武雄ぶゆうと天祐てんゆうの神風かみかぜにより遂つひに之れを掃蕩そうたうせしことは、既に歴史の證明せうめいする所で、今更喋々いままたてうてうくする必要ひつたうはありません。唯此度武藤資時の事蹟じじせきに基もとづいて、新曲資時しんきよくすけときを作りましたに付て、其採用そふいようした材料ざいりよう丈だけの事を申して置おきませう。

湯地君ゆぢくんの御著述ごちやくじゆつになりました護國美談ここくびだんは、廣く諸書しよしよを参考さんこうせられて出来て居ゐりまして、元寇げんこうの事は是れに依よるが正確せいかくでありますから、總て是

れに依つたのであります。此の護國美談ここくびだんの口繪くちえの裏うらにあります、十二歳の初陣はつじんといふ、資時の事を詠いじられました。唱歌せうかには左の通りあります。

年は僅かに十二歳、
學まなびの窓まどの其間そのまにも
やがて文永秋のころ
稚おこな心のやさしくも
敵陣てきじん近く進すすみゆき
力をこめてはなちしが
しこの夷えいは之れを見て
さすがをさなき資時すけときも、
弘安四年の軍いくさには

小貳せうにの孫まごの資時すけときは
弓矢ゆみやの道の教おしあり
蒙古もんこが襲おそひ來るとき、
鏑かきや矢やとりて勇いさみたち
矢竹心やたけこころの一ひととすじに
おもふ矢やつばに及びかね
わらわの、しる聲こゑ高たかし
無念むねんの涙なみだにむせびけり
十有九歳じゆいうくさいとなりぬれば

いきをまもりの職となり
思ふがまゝになぎ倒し
あだなす夷つくるまで
かねて誓ひしかひもなく
敵の毒矢に斃れしは

敵陣ふかく打入りて
そのいさをしは類ひなし
かひなの力ためさんと
運命こゝにきはまりて
いとをしむべき男子なり

この唱歌は事實其儘を歌はれましたものでは是れが正しいのでありま
すが此の謡曲の方では少しの違ひがあります實際おつかさんの所へ
参つてお暇をしたかせんかも分らず又弓矢をおつかさんがくれたか
どうかも知れませんが當時の事を想像して視ますると随分この位の
ことはあり内であつたらうと思ひます子に別れるのがいやだといふ
て泣いて居る様なおつかさんであつたらば決して此の様な健氣な男子
はよふ育てますまい屹度此の弓矢で敵を射つて來い位はいふたであ

らうと思ひます其邊の考へもあり謡曲としては少しは情合といふこ
とも欲しかつたから此の前半をもふけたのであります
又文永十一年の役に資時が十二歳で弓を射り矢が屈かすじて敵に笑
れたといふ事は確に書物にあります但其後はどうしたといふことは
書いてはありませぬ敵に向つて矢を放つ位の氣性でありますから笑
れたら必ず怒つて切り入る位の考へを起すには相違ありませんが其
所は實際は分りませぬ其れを切り入る事にしたのは七年後の弘安四
年の時には十九歳で花々しき働きをし討死したといふことをはめ
かして此の曲の賑やかになる爲めに用いたのであります終りの文句
に「常盤の色若緑り扱こそ後に資時が武名は世々に響きけり」と止め
ましたのは此の邊の考へがあつての事でありませぬ劉復亨と立ち合ふ
などは唯だ曲としてのあやでありませぬ資時の精神を發揮するを主

としたのであります
 唱歌の方には小貳の孫とありまして此の曲には經資の子とあります
 が是れは双方共に間違ひはないので太宰の小貳と申は官命で代々之
 れを受け繼いで参るので資時の祖父に當る入道覺惠と申人が名高い人
 でありましたから其人を主として孫と書かれたのであります
 經資といふ人も中々名高い人で趙良弼の來りて國書を直に京師へ送
 らんと申したを拒んで許さず遂に其の寫を取つて之れを時宗に送り
 其後趙良弼を追歸せし程の人でありますから謠曲の方へは此の經資
 の方を元に立て、子としたのであります蒙古の使者の首を斬つたの
 は實は資時が十二歳軍よりは後の事でありましたが彼の事は時宗の大
 英斷でありますから苟も元寇の事を曲に顯すなら必ず出すべき事
 であると思ふて出したので必しも年代に拘つては居りません

明治三十八年三月十四日印刷
 明治三十八年三月十七日發行

定價 金拾五錢

著作發行所兼

池内信嘉

東京市麹町區富士見町四丁目八番地

印刷者

小西幸吉

神田區三崎町三丁目一番地

印刷所

日本印刷株式會社

神田區三崎町三丁目一番地

發行所

能樂館

東京市麹町區宮七見町四丁目八番地

發賣所

大日本護國幼年會雜誌部

東京市麹町區飯田町五丁目八番地



不許複製

○能樂は流派に拘らず能狂言に關する諸般の記事を網羅せる月刊雑誌なり

○多くの博士學士等の集合より成れる能樂文學研究會の論說記事は細大漏さず其紙上に登載せらる

能樂

毎月一
日發行
前金 一冊拾五錢
定價 六冊八十五錢
郵稅 共
三冊一圓六拾錢

發行所
東京市麹町區富士見町
四丁目八番地

能樂館

○諸大家の論說記事は常に當紙上に滿載せらる

○謠曲講義、能樂師の談話、謠曲の事蹟、通俗能談、狂言評釋、各地能況等は每號必ず登載す

○謠曲事蹟に關する圖畫、能樂師肖像、面、裝束、其他必要の圖畫は寫眞版として每號必ず添附す

○明治卅五年七月以來間斷なく毎月發行し當二月を以て第參卷參號となり總計參十參卷目に及ふ

4

9

新作
謡曲 資時

国立国会図書館

075010-000-0

特49-111

新作謡曲資時及附録

池内 信嘉/著

M38

CEL-0934



特

1

